

前書き

この前書きは専ら学外者に対するものであることを予めお断りしておく。

『アジア言語論叢』は本学研究所の刊行物である『外国学研究』を利用して、神戸外大のアジアの言語を専門とする研究者を核にこれまで不定期に刊行してきた。不定期なのは、『外国学研究』が学内研究班の成果報告書であり、この研究班に採択されなければ、発表できないからである。以前は毎年2班採択され、競争はそれほど激しくなかったもので、運の良さも手伝い、ほぼ2年毎に刊行できたが、研究班制度も変わり、今や**Research Project-B**の成果報告書ということになった。この制度で採択されるのは1班のみで、その班の研究が終了しないと、新たな研究班の募集はないから、他の研究班が始動するという事は有り得ない。この新制度を利用して我々の研究成果をコンスタントに刊行し続けるのはもはや不可能な状況である。恨めし気なコメントだが、班長も来年度いっぱい退職だし、『アジア言語論叢』は今回の第10号で打ち止めとなる。

本学には以前から中国語以外のユーラシア大陸東部の言語を専門とする研究者がいて、この研究班制度を利用して『内陸アジア言語の研究』を刊行してきた。最初は今は亡き庄垣内正弘教授が編集していたが、京大に転出し、この後は吉田豊教授が同人誌のような形式で、編集の場を学外に移し、刊行を続行しておられるようである。既に以前の前書きで書いたことではあるが、『アジア言語論叢』は学内的には『内陸アジア言語の研究』を継承するつもりで始めたものであった。吉田教授もまた京大に転出し、当初の2名とも本学からいなくなってしまったが、この二人の後をチベット語の武内紹人教授（私より早く、今年度いっぱい定年退職となるが、後任には同様に優秀な方が来られることだろう）、チベット・ビルマ諸語の林範彦准教授が引き継いでおり、手前味噌な物言いであるが、これに日本語、中国語の研究者を加えると、アジアの言語研究において本学は依然としてなかなかの陣容を擁している。『アジア言語論叢』はこれで終了となっても、別の新たな形で本学のアジア諸言語の研究は続いて行くであろうことは疑いない。

本研究班は2年間の研究期間で**Research Project-B**を申請し、採択された。この2年間の活動のうち、国際会議についてだけ、ここに簡単に紹介しておきたい。

2015年1月10日に劉丹青、胡建華両氏をお招きして、「言語類型の推移」というテーマで研究会を開催した。川澄哲也、石汝傑、李仲民及び本学の竹越孝、任鷹（順不同、敬称略）が研究発表を行った。

同年10月24日にはチベット・ビルマ諸語/タイ・カダイ諸語研究会と共催で、中国少数民族語を対象とした研究会を行った。文献言語研究が主体で、他にフィールドワークのデータに基づく比較言語学的研究、漢語方言の言語地理学的研究などの研究発表があった。発表者は南開大学の施向東、孔祥卿、曾曉渝三氏及び岩佐一枝、富田愛佳、遠

藤光暁、林範彦（順不同、敬称略）らであった。

この翌日の10月25日には「中国語の文献言語学と方言地理学ワークショップ」が開催され、漢語方言語彙、少数民族語彙を対象とする言語地理学的研究を主体とする研究発表が行われた。発表者は汪維輝（浙江大学）を始め、岩田礼、平田昌司、鈴木史己、八木堅二、黄河、更科慎一、遠藤光暁、岩佐一枝（順不同、敬称略）の諸氏であった。

いずれの会議も神戸学園都市UNITYで開催され、和やかな雰囲気の中で活発な議論がなされた。最初の研究会については沈力教授（同志社大学）、あとの二回の研究会については遠藤光暁教授のご支援の賜物である。お蔭で三回の研究会は全て成功裏に終わった。

今回の『アジア言語論叢』はこのような研究会の議論、そしてメールを通じての意見交換などによって執筆、完成された論文を収録したものである。論文の配列順はオーストロアジア、オーストロネシア、シナーチベット語族の順で、シナーチベット語族はチベット-ビルマ語系と漢語に細分し、漢語音韻学を最後に置いた。各分野は執筆者の姓のアルファベット順である。今回はこれまで以上に対象言語のバラエティに富んだものとなった。各執筆者の貢献に心より感謝する。

Badenoch 論文はラオス北部で話されている **Bit** というモン・クメール系言語における人称代名詞に関する考察である。ビット語は、今までほとんど記述がないが、古形を良く保っている言語と考えられ、今回の論文は人称代名詞について周辺の他のモン・クメール系言語と比較したものである。

落合論文はセデック語パラン方言の方位認識に関する言語学的考察である。傾斜が空間認識の軸となっていること、そして文献に残るデータを利用して、民俗方位形式の史的変遷を考察したもの。

藤原論文はインド北西部で話されているチベット-ビルマ系言語の一つ、チャック語の民話を採録したもので、今回のものには言語学的考察は盛り込まれていない。とりあえずは逐語訳から言語特徴を理解して頂くとして、音韻体系その他、この言語の言語学的特徴の詳細については氏の一連の論文を参照されたい。

林論文はラオス北部のチベット・ビルマ系言語のアカ・ブリ語の音韻論と基礎語彙である。現地調査に基づくもので、既往の研究に比してより一層詳細なデータを提供している。

鈴木論文はチベット方言に関する音声学的特徴の考察である。氏の確かな音声学的記述はチベット語方言学に寄与するところ大であると考ええる。

遠藤論文は雲南省の漢語方言の声調体系の歴史的変遷を言語地理学的アプローチで考察したものである。（単字音）調値の変化は自立的变化の結果ではなく、方言間借用による場合もあると思われるが、言語地理学的なアプローチはそのような変化についても明らかにしてくれるであろう。

川澄論文は青海省漢語方言のフィールドワークのデータである。土族の漢語話者の話す方言の声調について実見音声学的分析を試みている。氏の「漢兎言語」研究の一環を成す

ものである。

太田論文は以前、研究叢書の一つとして刊行したものの続編である。注、参考文献、前編の正誤表から成る。再度、検討を加えて、注に飽き足らず、補注を加えた。中には結論を提示できていないところもあるが、それらについては、今後の課題として別の発表の場（それがあれば）で明らかにしていきたい。

アジア諸言語の通時的・共時的研究班 代表

太田 斎

2016.6.30